

江戸  
時代  
童話  
童話

特別  
又 6  
9339  
4



江戸  
時代  
童謡  
童語

江戸時代童謡童語の歌は、  
江戸の生活や風俗を反映し、  
多くは口頭で伝承されてきた。  
この本には、江戸時代の  
童謡と童語の歌が、  
当時の歌集や文書から  
採録された。歌の形式は、  
多くは五七調で、  
内容は、自然の風景や  
生活の出来事、  
遊びの歌などが多く見られる。  
童語は、子供が使う  
言葉や、遊びの歌に  
使われる言葉など、  
江戸時代の子供の  
生活や遊びの様子を  
よく伝えている。

竹清蔵

中氏  
圖書

今日家  
書乃天  
下書也

明治廿六年十月

昆石

改言

一 此巻のあけつゝ頃のうそや言葉の中は解らぬ事ある  
そは當めのゆゑ言葉とあらぬ故に申古言違(まじ)りとも  
多かめ今明し難うは侍けんをよむなり  
一 有信の頃ひ 音のまを記せば 假名七かゝを曲げ言  
葉の長短(ちぢみ)をなすそのまを知ら易からしむる事

目録

手越頃	羽子突頃	子玉頃	盆々頃	子守頃
月夜頃	種々遊頃	種々遊言葉	間違易き言葉	
神ゆん	尻とり			



江戸  
代  
童謡童語

岡本昆石

手越頃

向ふのち敷へ針刺か通る印籠巾着ぶらりと下げて  
お手には淡竹のお竿をもちつゝあの鳥刺したくは雀の  
鳥を飛んでゆきちりる古風のお城高きお城一段あは  
れぬあはれ三つあがりて南を見れば美いよ子か三人通る  
一 おまらふは遠くの娘に子よ子はこの娘に子よ子  
はさうらゐの娘さうらゐの娘は粧飾者(や)やなひか一幅帯  
をまか茶い湯めて結んだところがお葉の松

見たり 同  
 づうくつれ 女 舟 二 提つうづうく 三 提つう  
 ちかあせ エヨ 歌 船 とあ 二 提つう 女 舟 に 五 提 せ 舟  
 な 五 提 せ 舟 三 五 提 せ 舟 三 五 提 せ 舟  
 と 目 が 暮 る 日 も 暮 れ 舟 三 五 提 せ 舟  
 ア 三 者 御 座 今 迄 は 舟 三 五 提 せ 舟  
 目 元 に 比 較 し 舟 三 五 提 せ 舟 三 五 提 せ 舟  
 か げ ぬ な 猛 る 金 子 七 重 舟 三 五 提 せ 舟  
 海 の し ら だ さ 舟 三 五 提 せ 舟 三 五 提 せ 舟

片袖に梅の枝

過 二 提 つ う 過 二 提 つ う 過 二 提 つ う  
 裾 に 梅 の 枝 梅 の 枝 梅 の 枝  
 梅 の 枝 梅 の 枝 梅 の 枝 梅 の 枝  
 梅 の 枝 梅 の 枝 梅 の 枝 梅 の 枝  
 梅 の 枝 梅 の 枝 梅 の 枝 梅 の 枝  
 梅 の 枝 梅 の 枝 梅 の 枝 梅 の 枝  
 梅 の 枝 梅 の 枝 梅 の 枝 梅 の 枝  
 梅 の 枝 梅 の 枝 梅 の 枝 梅 の 枝  
 梅 の 枝 梅 の 枝 梅 の 枝 梅 の 枝  
 梅 の 枝 梅 の 枝 梅 の 枝 梅 の 枝  
 梅 の 枝 梅 の 枝 梅 の 枝 梅 の 枝  
 梅 の 枝 梅 の 枝 梅 の 枝 梅 の 枝  
 梅 の 枝 梅 の 枝 梅 の 枝 梅 の 枝

前 の 山 の 崎 崎 は 三 崎 崎 崎 崎 崎 崎 崎  
 も ち づ づ た 一 の 木 二 の 木 三 の 木 崎 崎 崎 崎 崎  
 下 じ 文 一 本 崎 崎 崎 崎 崎 崎 崎 崎 崎 崎 崎 崎 崎

ツた何あかう何あ引こつた顔音堂引こつた顔  
音堂や日が暮れぬ松葉に刺れて目が覚めた

桃月様同 鏡長か貸し何んに仕や桃の葉を刻か  
の葉の中かろうか一丈博とてはつとに幾しと出  
何所へ行やう能く行やう能く行やう能く行やう能く  
午在樓(出せゆけてつて) 後のお馬がきこまらぬ  
彼猿焼つて愈々猿焼つて愈々  
同

おまのく柿の木鳥が多足とラまッて一羽の鳥が  
もにアお前も大きく成つたから成つたからおみやの  
ら(身はまッて) らせ三枚ござ三枚今せん三枚焼じ  
めて吸物なま(お) したるが(い) しゃら(い) しゃら(い)  
啼やア(お) みやの背血が付いて血いじやある  
紅じやアの 紅の血が付いて血いじやある  
有らま一紅じやアの 高方(あ) めあせつて子したるば  
お高のま供がなつたた(ら) ん(ら) ぬ(ら) ぬ(ら) ぬ(ら) ぬ(ら)  
系とつて子や(き) 機織つて一丁目の紺屋(遠) たら  
は一丁目の紺屋を請取らぬ二丁目の紺屋(遠) たら  
請取つた三月極が強くやうに

この書は...  
 一、招きつけし  
 野の...  
 大福の

大福の...  
 負うちは...  
 のをよ...  
 下谷...  
 今年初...  
 一、結...  
 縁の...  
 大福の

この書は...  
 招きつけし  
 野の...

後...  
 女...  
 物...  
 京...  
 の和...  
 後...  
 女...  
 女...  
 女...

この書は...  
 招きつけし  
 野の...

つて見たらうが此鳥此鳥中まうこまうニツツしりの  
貝ホツホツの貝目ツツ目貝目貝目始つてお釈迦の  
おけつ鳥りえんた

同  
高通り山に鶯が一羽子破奴刺して糸うと翠の道  
し子竿じや捕れぬ草で捕りて竿を  
言わて幾河の茶をこしに揚二に燕五三に下りる  
獅る牡丹子、草、伊山の子本梅子、紫色と赤と  
七ッ帝天ハツ山牡丹丸ッ小梅を散しに散り子十  
同  
梅、春のあざよ

経路三よ哩大  
お住持たらし

一三三四かしのけしきまていんかてか  
まけきやまやまや梅のつ枝に登候してひね  
し一丸の下で文を一本拾つてひらつて文の上書  
ぶとまふ半巻まじりしきりてんて皆さん名敷  
合んやうなる球をストンと突たうが球が  
飛入り本所所の鳥象の鳥象で西海せんす

同  
かん横よりく横所の草やまんか草の一本はくた  
三千二文であるまきまきまかからかすちやらかまん  
お前のを有る買たげよ花おとし井かおしまる枝  
庵丁出しかけと顔と  
る唐のいれい二三四かみよの若田堅  
る唐のいれい二三四かみよの若田堅

不御せりくこども  
でもおあげよ  
一三三四かしのけしきまていんかてか  
七ッハハ九ッ唐  
から降りたおん

あまのついでに刻て袂へ入れエる袂がツシ後うけエた、

あんなにうれしくお正月始まつてお正月は喜ぶ者が  
子供衆嫌がる者お正月お正月の嫌ひは大晦日迄  
明けば元日お正月始のあ祝儀中お正月お正月  
お茶持て来ぬお正月お正月お正月お正月  
お正月お正月お正月お正月お正月お正月  
お正月お正月お正月お正月お正月お正月

お正月お正月お正月お正月お正月お正月  
お正月お正月お正月お正月お正月お正月  
お正月お正月お正月お正月お正月お正月  
お正月お正月お正月お正月お正月お正月  
お正月お正月お正月お正月お正月お正月  
お正月お正月お正月お正月お正月お正月

△お正月お正月  
お正月お正月  
お正月お正月  
お正月お正月  
お正月お正月  
お正月お正月

お正月お正月お正月お正月お正月お正月  
お正月お正月お正月お正月お正月お正月  
お正月お正月お正月お正月お正月お正月  
お正月お正月お正月お正月お正月お正月  
お正月お正月お正月お正月お正月お正月  
お正月お正月お正月お正月お正月お正月

お正月お正月お正月お正月お正月お正月  
お正月お正月お正月お正月お正月お正月  
お正月お正月お正月お正月お正月お正月  
お正月お正月お正月お正月お正月お正月  
お正月お正月お正月お正月お正月お正月  
お正月お正月お正月お正月お正月お正月



の物は女に奪ふ

おんかへくかぢ様屋敷に夏どりや来鳩、其米落ち  
る御ともあちちのサツサ七ちく、サツサ落く竹向  
白壁造りの格子造りの赤い暖簾の掛つたお嬢様  
までお返し申す(おのこまゝの御) 請エ取つた清御  
大事のお純を奪ふた蝶や花よとお育ち申す

大丸玉子から東を見れば川の扉におもはせ書  
おきばきーたる水牛の櫛は誰れに奪つたを討成せ

すれば清お命男におもはせが惚れとまねと向ちな  
ちつてやしお驚お若さんつらしお驚お若さんお  
おんこらり牡丹の花より梅の花よりお  
まア、しいた、

春は初葺梅の花若山珍恨の卵の花山やしや  
は石居の花らうげつしちうせつう命を練の  
の云々お石の造つた石のり用奴さアん何所  
田圃馬を遊ばせに遊ばせしやんせ子供邪魔に  
なるサツサも邪見な奴さん一ニう三ニ四う六う  
七う八う九う十うを返して一貫貸しまア、し

同  
あんな白きうら／＼白木屋のお物さん力三さん。煙草のすか  
りは丈六さんお前とゆつて逃亡しよろ、何んかう何ん道  
かけおちしよき急田圃は皆らんぼ一三三三四共  
六三七十八ア九ノ十ヲ、

同  
一三三三四アおみよのき急わかすみ通れがたん圃の  
棲い雀が一羽とつまつてその雀が鷹に蹴りんと  
しやえり／＼雪やさらん／＼ちよろ／＼ど一羽かまや、

同  
奥さんあけのた盛り三三三三とあせしやうか、

子母しよんたちて  
うらとまてんまて

三重の重箱(おんすぶ)をて、即ち牛う方に響き振城  
て、修築するに于亂さん赤貝さんにもかまて、モラサモサ、

同  
六六の揚屋所三浦高村米々の君皆々道中業事  
あるも春先に見よなる花紫桐川清川桐谷清川西  
ゆり合すして立田の川信濃の善光寺マノセコノセ  
ノセ前見イしヤ一勢川見ハ川ヤハ田名重の中  
娘あま色白で梅色で目元に比類してイタウ壺屋  
貴さま、水で其梅やが粧飾を極度で、今福純子の  
藍紫七重ぬ八重かきぬと流めてくたさ、紺屋の  
紺屋のものをあつ流めても進工張つても進工が、樽梅ハ何と

付まする角袴に梅の折枝梅の折枝、胴は五條のそり梅  
そのそり梅袴の者をもひらぬ者として、千ヨキに千ヨツきう袴と  
破ちて叩れて、二折で折、水色茶色の女に折れ、江へおれ  
えて、而りなつと、身投げ、たそ、身は泥を髪  
は、髪すけいも、さぞ、敵の親、念、皆、今、黙、力、  
サテ、合、黙、か、れ、で、身、が、一、身、貸、し、ま、し、し、つ、た、

と、敵、様、の、お、一、行、ち、や、か、ん、折、女、の、家、の、帯、帯、い、に、  
帯、の、よ、も、ら、か、値、も、よ、か、ら、結、め、て、み、た、ら、ば、ふ、く、い、と、帯、ん  
で、み、た、ら、ば、ち、ま、く、と、行、流、う、ち、に、お、い、た、ら、ば、婦、女、と、な、れ、て、  
腹、が、ち、ら、ん、ん、な、に、お、腹、が、な、な、う、が、金、の、金、で、も、  
あ、げ、や、ん、し、よ、

講、家、の、内、儀、世、帯、持、ち、い、世、帯、持、つ、た、ら、下、婢、お、い、下、婢、  
と、三、人、通、い、た、ら、ば、二、人、の、下、婢、が、馬、鹿、者、で、一、人、の、下、婢、が、西、  
の、者、で、一、人、の、下、婢、が、出、し、て、君、が、通、り、と、寄、り、け、い、と、寄、り、  
か、通、り、と、顔、か、く、す、

山、王、の、お、様、様、は、あ、い、か、各、段、が、大、お、好、い、ら、シ、ヤ、シ、テ、  
シ、ヤ、シ、お、い、ち、お、比、勢、講、に、招、れ、て、朝、の、お、女、房、(小、四、の、話、)   
の、吸、物、一、杯、カ、ス、ラ、吸、ス、ウ、ラ、二、杯、カ、ス、ラ、吸、ス、ウ、ラ、三、杯、  
目、は、は、名、重、の、梅、多、味、さ、ん、が、下、物、が、無、い、と、か、う、  
腹、が、ア、ち、ハ、テ、サ、ハ、テ、サ、ハ、テ、サ、ハ、テ、サ、ハ、テ、サ、ハ、テ、サ、  
ハ、テ、サ、ハ、テ、サ、ハ、テ、サ、ハ、テ、サ、ハ、テ、サ、ハ、テ、サ、ハ、テ、サ、

まをうしつた 千をツセ方をツセ、かた、アのたつたのだ、

同

斯く申せば(名好娘の孫)中村の中村島八一娘年十六  
名におおかんの友達早九人、早九人の友達天保  
齋に齋つて一歩の煙草に二歩煙草、三歩の煙草に火  
を付けてお仙に吞しまし出したうかお仙の娘だと吹  
た先、有馬の奴さんともめて一歩煙草しよあした

同

向ふのお山の高きまにさかすまの山多きかお仙さんが  
お茶あがれお茶よりの新茶よりの茶を  
お女一才飲した、物たアもう抱つてお仙さんおれが殿  
の事だ、うら

殿御の事、お仙さんは  
おれが殿御の事、お仙さんは  
おれが殿御の事、お仙さんは

同

突鏡おこころ、サア春ら、サア春ら、此巻に買けたお仙さんは  
取とと思ふ、お仙さんがお仙さんがお仙さんがお仙さんが  
お仙さんがお仙さんがお仙さんがお仙さんがお仙さんがお仙さんが  
お仙さんがお仙さんがお仙さんがお仙さんがお仙さんがお仙さんが  
お仙さんがお仙さんがお仙さんがお仙さんがお仙さんがお仙さんが

早記  
お仙さん

お仙さん、お仙さんがお仙さんがお仙さんがお仙さんがお仙さんが  
お仙さんがお仙さんがお仙さんがお仙さんがお仙さんがお仙さんが  
お仙さんがお仙さんがお仙さんがお仙さんがお仙さんがお仙さんが  
お仙さんがお仙さんがお仙さんがお仙さんがお仙さんがお仙さんが  
お仙さんがお仙さんがお仙さんがお仙さんがお仙さんがお仙さんが  
お仙さんがお仙さんがお仙さんがお仙さんがお仙さんがお仙さんが

朝の早記、お仙さんは  
おれが殿御の事、お仙さんは  
おれが殿御の事、お仙さんは

に由揚が寺の總菜先づ一夏分しまアした、

同

よりわづらひの由樂の由會所の姑じやと云ふ  
まにいはねの班の會樂の遊のなんす  
所せ痛しよか茶急茶と云ふか急茶  
所も嫌よ云しやち前の別がようい

同

かんどうどうくどう猫さん三毛猫さんち前の  
しつあから何お遊遊しよ若多田圃の真中  
向物店でも出しまアヨカ、

山崎のヲ和島さん猫がち好む猫や歌感ノ抑こい  
鳥取押しヤニヤンと舞くおニヤニヤンのニヤンと舞  
く先々身貸しまアしつた、

猫や今にやが来りから夜もや本間や云ん  
置アレ身んだ中からぼろが出エた

同  
月夜の晩に重箱始つて明て見たら火福鏡頭  
見たら傳兵衛さんのお蔭

向ふ通る吉三じやあいか鉄砲切つて川場を  
舞子のお山舞子うちまね舞子がうてたら早口持て

同













日光の影が... 供... 二の丸越えて... 三の丸境... 井...  
 あげて井... 巻井... 釣... 籠... 水... 汲...  
 衆... 京... 女... 衆... 京... 女... 衆...  
 は... 京... 女... 衆... 京... 女... 衆...  
 に照し... 女... 照... 籠... 籠... 籠...  
 西國... 長... 西國... 長... 西國... 長...  
 馬... 馬... 馬... 馬... 馬...  
 引... 引... 引... 引... 引...  
 同  
 十六七日...  
 (十六日の娘の手を引かた)  
 (十七日の娘の手を引かた)

西國... 長... 西國... 長... 西國... 長...  
 馬... 馬... 馬... 馬... 馬...  
 引... 引... 引... 引... 引...

日光... 影... 供... 二の丸... 三の丸... 井...  
 あげて... 巻井... 釣... 籠... 水... 汲...  
 衆... 京... 女... 衆... 京... 女... 衆...  
 は... 京... 女... 衆... 京... 女... 衆...  
 に照し... 女... 照... 籠... 籠... 籠...

西國... 長... 西國... 長... 西國... 長...  
 馬... 馬... 馬... 馬... 馬...  
 引... 引... 引... 引... 引...  
 同  
 十六七日...  
 (十六日の娘の手を引かた)  
 (十七日の娘の手を引かた)

びた張りのめすき  
のあけ

鍋の「ゆい」湯の「こも」何故又ゆい何故又ゆい  
大ラ鍋の「湯」出エる比エて出エる、

同  
桶の「ゆい」桶の「こめ」何故又ゆい、  
大ラ桶の「桶」出エて出エる比エて出エる、

子守唄

物々「よう」おらりよう、坊や「良子」だもねんねしな、  
坊やの「お守」何故いたア山々「越」して里「いた」ア、  
お守「身」に何「ラ」費「た」ア、大「教」に望「の」笛「エ」、お「起」揚

リ坊子に大張子ヲ、

同

寝ん「よう」おらりよう、坊や「変」なだ寝んねしな、  
ゆい「寝」を仕「て」起「きた」る「ア」、赤「の」敏「に」魚「は」て  
エ、好「お」たん「と」費「た」げよう、

同

おぢ「お」山の「白」兔「何」故「に」お「身」が「長」い「よう」、お「母」  
さん「の」腹「に」居「た」ら「に」い「推」の「實」推「の」子「女」  
た「ゆ」え、そ「う」れ「で」お「身」が「長」い「よ」、  
寝んね「根」の「い」ら「猫」え、人「さ」見「い」れ「ホ」癒「た」が「る」、

親き見れが各みたがう、

同

寝んぬこさつ、所をの子ヲ、所をじや、嫁をて  
追出したア、追出た高もなく、見が出来たア、男の児  
なう、品清せ、女ヲ、女ヲ、守るて、

同

寝んぬ、よら、かこり、よら、子守、樂なやう、  
い若う、か内儀、さん、りや、叱られ、子、りや、  
三月、が、来、こ、つ、い、ん、包、を、下、げ、て、  
さん、左、様、な、う、復、来、ま、す、う、且、那、さん、左、様、な、う、  
い、て、エ、

月夜明

おつ、月、夜、明、  
何、不、往、た、由、買、ひ、に、茶、買、い、に、由、  
いつ、て、轉、ん、で、由、一、休、  
お、お、の、犬、と、  
其、お、  
した、雁、が、  
あ、つ、た、

大いなる月様 雲がかくすともかくすなら 月隠れ  
かくせ

兎うさぎ 何れ見ても 十五の月さアア  
見てもア、收まアア

影もろくろ 十三夜の牡丹餅

草履さん 数人の子供下駄片足づつ 並ぶ 端から 数  
かたんの 樹の下

葛蒲が咲いたか 咲かぬか まぎら 梅は 妙々  
七子に 採つて みたならば ちぎら ちぎら 十三  
雪隠の 奥さん すつとん とん

猫や 何れ 猫見身 何れ 飯は 何れ 飯  
食の 骨が たアア 産んで 食の 骨が 付く 虎  
食の 水が 付く 十 食の 骨が 付く 虎  
虫の 大薬 若し 吉原丸が 湯に 入る 湯に  
や 二 夕 三 夕 四 夕 五 夕 六 夕 七 夕

遠く見ゆ  
子も  
いふ  
たう  
の  
の  
イ  
イ

七女をいへ八女をいへ九女をいへ十女をいへ  
是れ女(或は是れ男)

赤兎を膝の上へ載せく揺りなると

千ぢや万艘か船やギツチラコギツク増げの患比壽枝

大黒次武方福の神いよ

数人の有信各母子の怪ふせ並(中の人)

指ひて片場より奉の赤せ交らるる

追つれすつぽんちせん後けたアうとの子のどんとこし

つちくたつちく太右衛門殿の姫様 湯屋で押

いふまじりまじりまじり  
子近をむとらひん  
えんちんちんちん  
一と依の蓋まら  
まらちローち回つて

れと泣聲前やぢちんちんちんちんちん

二人三川の子取つて尋めらるる

入道 著ぞ膝の年次亦中々の

二人の右侍と甲の左の侍と互違ひに

ちんちんちんちんちんちんちんちん

んちんちんちんちんちんちんちんちん

に成りし

ちんちんちんちんちんちんちんちん

イチドコクメチコク

イコ





二人の供互遣に片子を振りまき  
どりく月あはにせめて家の餅を娘と米の餅を娘  
と蕎麦の餅を娘といたしな

道中智の籠やから駕籠や馬より牛より  
とつちや三百だ、  
二人の供互に烈々舟の二人共上に乗せ

誰にやら物に遣らぬとすめ  
まさ日諸所の神さまお恵比壽頼んでおまじ  
たのいこつちア福の神かあいよ、  
風をあげるときに

風揚れ揚つたら蕎麦を食せ下つたら焼く食せ

風吹すなアふけと蕎麦の山て麦より遠らぬから  
と羽子をかきぬに

風吹くなアふくなと蕎麦の山て麦より遠らぬから

べちべちの誰かしたたかたがたの音

波つた何の子提灯の燃ふ子揚つて遊ぶたづら

風吹くからアアアア  
水はさるるを根を食  
なほわろろアア  
とぬこーな

イ  
あつとこまを提えたり  
まはまをこまを提えたり  
つとこまをこまを提えたり  
らつとこまをこまを提えたり  
らつとこまをこまを提えたり  
らつとこまをこまを提えたり  
らつとこまをこまを提えたり  
らつとこまをこまを提えたり

いあぬいえやねん  
おーくうらまをまらて  
塚をフえん中をすう  
こえんであはげ  
る年と

奴さん何処へ姓をやるは  
にんしやんせ女の親を  
あつて秤に

あのおれさんあつて秤に  
あつて秤に

あつて秤に  
あつて秤に

あつて秤に  
あつて秤に

おれさん何処へ姓をやるは  
にんしやんせ女の親を  
あつて秤に

湯にゆきまいた商人  
さんは今髪を結ておまを

二人の供双方割れて  
あつて双方つになんか

あつて双方つになんか  
あつて双方つになんか

あつて双方つになんか  
あつて双方つになんか

あつて双方つになんか  
あつて双方つになんか

あつて双方つになんか  
あつて双方つになんか

あつて双方つになんか  
あつて双方つになんか

目をねがう様々愛さずさうさうから

目この目人にあたりたらあ免よ、あや先には若から  
悪くよ、

数の子供帯から帯はつかかりて長くなり免い麗

児を捕らこころ何の児を捕らよ波の児を捕らしよ  
数人の子供しやがんで帯のしら見つかまり後さし

羊虫こころこころ瓢箪ぼつこころ先後あのく千次平

へい先雨が降るか鏡が降るか見て来い、

数人の子供を引かれて下せくさる

定の川頼のみ車とんととあちるは流のみさ

二人舟中合せに舟子を持合つて

鍋のく底抜け、底を後そやとんぶらこ、

二人の子供繩のあを先を持ち此のみとま

おちめとらんぞより巻、大根舟員と廻ら、

どんどん指が返れば帆が通る、

おちめとらんぞより巻、大根舟員と廻ら、

お山の大将さこれ一人の娘れがあつても愛さぬ、

お嬢様お先、おいらあとの草履持ち、  
草履の代り足ふた

行倒れあれがせよ  
おんが五拍子  
おんが五拍子  
おんが五拍子

万運せ持て片足りて絶びなごり  
ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん

提灯 あぶら消えたるまよふ

塩屋 紋屋 老翁のあつた合

船子 二拍子の供交りて甲せぬ

引たり持といで道でくたげし番所の楳り

鬼の居なりうち流曜は 入相い三度鬼、鬼

ターニング中  
目録

ござれ、逃げなると鼻書、肩々ン後エた

歩行 幼児の手せりて歩きたる

此所 新と歩く子供に云ふ

入る 己のさびをすく人に云ふ  
田楽焼くとき手やいた

大急い 寒い時に云ふ  
女と男とを言ふ

女と男とを言ふ 女と男とを言ふ



今尋

這って直ぐに笑つた子に云ふ  
いた鳥がもう笑つた。

可惜

如人の天窓なき芥を付けて  
女が荷を背負つた。あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、女

おまへに

惚れた道途、  
群の火を赤子が負つてゐるに

火を赤

坊主、  
這って、おまへに云ふ、

這虫

毛虫、  
這つて、おまへに云ふ、

小僧

粉に、  
這つて、おまへに云ふ、

弱虫な子に向つて云ふ

家の前で庭を歩いた。

自家の前じやア始り貝外へ出ちやア現ッ貝、

坊主

坊主に向つて云ふ  
山藁、  
中々、  
尻を放れた、

目玉

ひよつくり玉提灯、  
玉尻玉

馬

繫いてある馬に云ふ  
豆一升、  
やから腹を説いた、

猿

の聲、  
鳥、  
牛房、  
焼いて押ッけら、

鳥

かんたあ、  
鳥、  
子前の家が焼けた、  
早く行つて水掛けら、

鳥の鍛冶屋の勘定本に「鴉」の字あり、その和名を  
 鴉に云ふ

鴉とら、油揚げや、やからや、とらつてみせら、  
 雁に云ふ

雁はみつらうや、後の雁が先になつたらかうか、いしよ  
 への字になつた、ふんまふ

あ、鴉に云ふ、  
 か、と種を相、

鴉、鴉、来、う、さん、  
 蝶に云ふ、  
 呉り、ゆ、下、で、酔、う、各、ま、し、  
 今、ま、の、鴉、は、う、ま、い、び、ん、な、  
 14

蝶々止まれ、や、菜の葉、よ、ま、ま、

老青、来、う、い、や、ん、ま、あ、つ、り、き、き、し、や、め、し、

鴉、牛、角、出、せ、鐘、ラ、出、せ、  
 表、い、け、ん、が、あ、い、な、

あ、鴉、の、か、も、あ、い、ま、ま、あ、ま、  
 鴉、と、い、ふ、

鴉、が、刺、し、ら、子、ヲ、捕、ら、

あ、ま、  
 鬼、灯、を、出、す、時、に、云、ふ、

あ、ま、い、し、赤、  
 と、い、ふ、

あ、ま、い、し、赤、  
 と、い、ふ、

あ、ま、い、し、赤、  
 と、い、ふ、

鳥の鍛冶屋の勘左衛門、嘗てとら、の和尙さん。

嘗に云ふ

嘗とら、油揚げ、とやから、舞、とまつてみせら、

雁に云ふ

雁にみつつら、後、の雁が先になつたら、か、か、と、  
へ、の字に、な、れ、な、ま、ま、ま、ま、

嘗に云ふ

あ、か、と、種、と、相、

端、端、に、云、ふ

端、端、来、い、さん、一、日、呉、り、日、の、下、で、  
水、  
跡、り、各、ま、り、

蝶々止まれば、や、菜、の、葉、と、ま、れ、

老、青、に、云、ふ

老、青、来、い、や、ん、ま、あ、つ、り、ま、さ、つ、と、や、め、つ、

端、牛、に、云、ふ

端、牛、に、云、ふ、捕、へ、と、ま、  
角、出、せ、籠、ヲ、出、せ、  
棧、箱、出、ア、し、や、れ、

茶、に、云、ふ

茶、の、か、も、活、い、ま、で、  
あ、さ、つ、と、と、

蜂、に、云、ふ

蜂、が、刺、し、に、ら、子、ヲ、捕、ら、

お、ま、に、云、ふ

お、ま、に、云、ふ、  
鬼、灯、を、出、す、時、に、云、ふ、  
餃、子、を、出、す、時、に、云、ふ、

老青、  
端牛、  
茶、  
蜂、  
お、ま、

お、ま、  
お、ま、  
お、ま、



赤い衣あせ取とりて遺いつから施ほせられたる

根ねが先まアミ出でエラ核たねの後あとから出でエラ

梅うめの木きや桃ももの果はちま、桃もも栗くり三年さんねん柿かき八年はちねん柚ゆず九年くねんで結むす

果はちまか、梅うめの酸すっぱと十八年じゅうはちねん

土つち筆ふでの探たづめは云いふ

土つち筆ふでの探たづめは云いふ

皆みなやめつかり物ものを隠かくしてぞらるゝ云いふ

天あまにツ足あし元もとに一ひとつ、結むす屋やの講こう家かに云いふ

同

巳いのち蔵くらに火ひがつさるゝだ、

人ひとから奴やつぬをさるゝたぬ云いふ

火ひ多おほいお世よ話わお茶ちやでも上うがれ、

善よいことさるゝたぬ云いふ

結むす梅うめ毛けだらけ座ざだらけ

取とつた見みえしやいな見みえしやいな、

毛けんがや毛けんが、毛けんがの性せい也、

也や半はんが痛いたつて泣ないてるや、

白グのよふに  
ちうこ

眼を向いてゐる子の頬(指を當がい呼んで  
ラット突かい棒

物の数せ算(る病

ちうこ たこかいち (ニツツに算(て)

ハニ三四五  
ハマシノトク

はまぐ(ハ子どもには)のどく (ニツツに算(て)

用のちいのい人を呼んで返辭せしため

ほかアん

何を付いておちいのい

お前の又窓に芥が付いてゐる (とれせると坊主はな

敷して背を見させたる

見たら木免おんだら又(とれせると坊主はな

ハニ三四五  
ハマシノトク  
ハニ三四五  
ハマシノトク

驚りする様ちぬに

驚き桃の木、山椒の樹子木、

吾れらとちつても吾れぬぬに

吾れらの核

周のこのあつたぬ

厄女、もつかい、現ツ貝、

上り目の、下り目、周りを旋つて猫の目、

指はて色の顔有毛目鼻、口齒を指して

下谷(いたい)へ行つて松原(肩毛)通つて、目黒(目) (驚つて

花屋(鼻)寄つて花一本盗んで頬方を北(口) (お世(口)

の周圍を回つて暮る(齒)でこつた、

ハニ三四五  
ハマシノトク  
ハニ三四五  
ハマシノトク

まはらまはらとんや  
おとこいふとんえん  
うさちまて中とま  
ましアワ三まをる戸  
てゆたて

婿り妻を子指から次男にあげ

子供の婿に親がどる人立ち申立ちが殺傷者だち木

を嫁ち子供かのどく、カッパにられた赤い顔をする

子の指を廣げ子指から次男に嫁

い婿を嫁ち、お島を嫁ち、又高瀬を、己も嫁から女

嫁り(豆をこし) 言ふとる様をり

女が子で形をこし、こしから

蟹から天王、虎やアヤ

心人に腕を出さし、指を嫁

素麺を煮るめん又根おらし、ちんぴく、奥へ入る

油持つて来い(と書いて照の下)

幼いの子を持つて

ちんぴく、あわ、あつとん、貝ごり

とらとのめやとらとの目

着てお、女服の袖を巻

徳、福、貧乏、金持

赤い餅、鹿がかわげさよ(と書いて赤)

咽喉を唇をさ

木山の狐が木の實をこ(と書いて木)

上唇と下唇と唇

高田の馬場や牛が鹿を養

尾張 紀州 水戸 薩摩 筑前 身にあはれあはれ  
 あい、紺屋のむし所、  
 人が痛いとちうたぬ  
 痛けりや、船の事書せしは、愛しの三草白り、  
 嫁あうと、やがれお無病の子になれ、三味線  
 ちうア、養育の子になれ、車が壊れたらうア、車力の子  
 になれ、  
 人がい、こゝをばてきたため

蟻が田圃で午睡して、おる蹴られて、月が朧めた  
 子を出し、うらむ、乞食のころ、  
 人が、病い、と、三味線  
 ちうが、無け、ん、が、本、三、角  
 人が、何、か、を、向、み、た、ぬ  
 何、が、う、ま、の、柿、の、ち、ぬ、  
 どのどの、遺、磨、の、縁、の、下、  
 どうす、り、ア、馬、の、子、が、出、ま、す、  
 人が、何、故、と、ち、う、た、ぬ  
 何、が、横、に、ぬ、  
 始、こ、の、金、が、三、味、線、と、ち、う、た、ぬ

おぼやうあけ

人が討があたると云う所の  
娘があつた大教ぞうける

べうに坊がつき天祥棒に月鼻

つげがつければ解天極困る

鷹土の坊が向あ

左様人が勝手を仕やると云う  
人があつた子と云う

物 厚くは振るると云う

おれはか目かす目かす

船がうたうあけ

おきんおきんとふ名の女に  
おきんおきんおきんおきん

栄とふ名の女に  
栄とふ名の女に

由さんおきんおきんおきん

録さんおきんおきんおきん

解と云うか









頼るは武の美ひ一餅三月能参りまづうまの難美奉  
時を御膳あつせに舞まらうと云うかたの大港  
とらんまのはかあはさん三づとて煙草にし日  
正直庄太史何夢のそ琴や三糸線笛太鼓大角の  
の白ドヤ白蛇の出るの柳崎しまの坊中  
お中敷おあけり雪敷之乃鏡是計箱煙草も坊  
やハハ三は將んぬしむ品川女あ敷の十女十女  
鏡蛇玉を伝はる火元祖宗匠の住の草  
菫庵編かけ雪庵にぬちからばそくばの鉦がらん  
ちやん一節やおつ噪四文おくれお夢がうま

ちらが正月お正月はの勢船空形も七福神神切  
曾名武内内田はけん夢七つ梅梅松梅の管原  
せりらでたむねた投島の山田今谷の火井川  
可愛けりやこそ神田から廻ふ廻ふ深草百歳のるさけ  
酒に看せなるおア氣も三度ほど横ツち  
よいかぶる顔せたるに梅の相模の女女夢に花が  
咲くさめ梅にちや物繫ぐつちが髪に火象  
もとま

去二年十月... 其書... 及... 赤松... 朱書...  
其書... 及... 赤松... 朱書...  
其書... 及... 赤松... 朱書...  
其書... 及... 赤松... 朱書...  
其書... 及... 赤松... 朱書...  
其書... 及... 赤松... 朱書...  
其書... 及... 赤松... 朱書...  
其書... 及... 赤松... 朱書...  
其書... 及... 赤松... 朱書...  
其書... 及... 赤松... 朱書...

同年十一月二日

山中 共古

乙卯... 過... 借... 教... 自... 願... 似... 生... 廿... 年... 時... 興... 美...  
遂... 鈔... 一... 本... 且... 備... 書... 予... 所... 知... 聊... 可... 補... 者... 以... 還... 時... 五... 日... 后... 見... 御... 經... 日... 也

印信 亥 却 齋



